

ワークショップ 設計＝デザインの哲学

なにものかによって設計され、つくり出される、これは技術的産物の一つの特徴と呼ぶうるかもしれない。このWSで取り上げる設計＝デザインとは、いわゆる美的デザインにかぎらず、こうした広い意味での「設計」のことを指している。技術の哲学は最近、より経験的事象に即した議論を展開しようとしてきているが、そのなかで注目されることの一つが、この設計＝デザインである。

一方において、設計デザインについては、機能と構造、その定式化のあり方について、純粹に記述的な研究があり得る。しかし他方、人工物を設計することは、社会や自己を設計するという意味ももつ。このWSでは、この後者の面にとくに着目し、遺伝子のような極限例？からの問題提起を受けながら、人工物の設計の孕む哲学的・倫理学的問題全般について、多方面から議論を深めることにしたい。

(オーガナイザ 直江清隆 (東北大学))

●金森 修 (東京大学)「遺伝子デザインの哲学」

遺伝子改良という仮想的事例を通して、所与の所与性が浮動化し、流動化するようになる時点での、人間の自己理解の変化を考える。人間の価値が身体的存在としての人間自身に反照するという事態の意味を探る。

(金森さんの提題については、再近著『遺伝子改造』2005.10 勁草書房 をもご参照ください)

●河野哲也 (玉川大学)「身体と環境のデザイン：特別支援教育からの視点」

デザインとは実用的な目的をもった配置・配分の原理であり、大量生産品に対する個性の強調した概念である。本提題では、障害児・者への特別支援教育や福祉の例をとりながら、身体と環境の協働的デザインについて考察する。

近年、特別支援教育や福祉の分野では、教育を上記の意味でのデザインとして考える発想が普及してきた。これは障害観の変化と対応している。

従来の障害観は「医学モデル」と呼びうる。この見方では、障害とは病気・ケガ・異常として理解され、教育や福祉の現場では、「正常」への快復を目的して、障害に対処するスキルや能力を個人に付与する治療的アプローチがとられてきた。これに対して、80年代に入ると「社会モデル (社会的構成主義)」からの異議申し立てが行われた。社会モデルによれば、障害は社会によって作られる。インペアメントは実在するが、それがディスアビリティとなるかは、環境によるとされる。このモデルは、医療・特殊教育の民主化を促し、インクルーシブな社会を目指す点で評価されるが、しばしば医療・教育の現場から乖離する社会運動に終始しがちである。

そこで、医学モデルと社会モデルを超えるためには、障害を「相互作用モデル (カナダモデル)」で捉えることが有効であり、そこから、環境デザインと個体の能力向上を配分する「デザインとしての教育」が提唱される。相互作用モデルの原理としては、・エコロジカル・アプローチと・エンパワメントがあげられる。

以上の特別支援教育と福祉の流れを概観しつつ、環境デザインとしてのユニバーサル・デザインとノーマライゼーションの原理、個体の能力向上としての身体-機械系（サイバネティック・オーガニズム）の意義と問題について考察する。

●石原孝二（北海道大学）「人工物設計の哲学と倫理」

人工物の設計に関する哲学的・倫理的分析の可能性を探る。

ウィナーによって提起された「人工物の政治学」やラトゥールの「委託」の概念、アイディの「解釈の多様安定性」の概念などを検討しながら、人工物の設計をめぐる哲学的研究の動向を概観する。

また、人工物のAgencyを強調する方向性と使用者の側の自由な解釈を強調する方向性の調停を試みるとともに、遺伝子工学やインプラント技術に対してこうした議論が持つ意義についても示唆を与えることも試みる。